

# 留学先決定に至るまでの経緯

宇隨 佳

マサチューセッツ工科大学  
経済学部博士課程

2022年6月

## 1 はじめに

はじめまして、2022年9月よりマサチューセッツ工科大学(MIT)経済学部の博士課程に進学する宇隨佳(うずいけい)と申します。経済学の中でもマクロ経済学や金融と呼ばれる分野の研究をしています。現在に至るまで、東京大学理科I類に入学した後、進学振り分けにて経済学部に進学し、学部卒業後は同大学大学院の修士課程を修了しました。以下では、自身の振り返りも兼ねて、どのような経緯で今の道に進むことになったかを記したいと思います。

## 2 留学を志した背景

ここでは、私がどのような経緯でアメリカの経済学博士課程への進学を目指すようになったかを記しています。

### 2.1 理科I類から経済学部へ

高校時代の私には、将来の夢や目標は特にありませんでした。東京大学の理科I類に進学したのも、高校の先生方とお話しする中で、理系に進んだ方が将来の選択肢が広いらしい、そして東大には進学振り分けという制度がある、といった理由からでした。こうして将来の夢を探す猶予を得たわけですが、あいにく最初の1年半ではピンとくるものに出会えず、あっという間に進学振り分けがやってきてしまいました。この時点でもまだ将来やりたいことが決まっていなかった私は、何やら経済学では数学を使うらしいと聞き、「なんとなく面白そう」という曖昧な理由で経済学部への進学を決めたのでした。当時の自分に将来経済学の博士課程に進むと伝えても、露程も信じないでしょう。

### 2.2 就職？進学？

3年生にもなると早めに就活を始めた友人につられて、私も夏休みに金融機関のインターンに参加したのですが、どうもしっくり来ず、徐々に進学を視野に入れ始めました。そんな私を後押ししてくれたのは、間違いなく所属ゼミの担当教員であった2人の先生です。彼らがゼミ中に複雑な数式や事象を明快に解き明かす様子に感銘を受け、経済学者が自分にとって憧れの職業になった瞬間でした。また、お一方はずっとアカデミアで研究されてきた一方で、もうお一方は国際機関を

経てアカデミアに戻られたこともあり、Ph.D. 取得後に幅広い選択肢があることを早い段階で知れたのも大きかったように思います。ゼミ以外の時間にも、お二人はご自身の留學生活やその後のキャリアについてお話ししてくださり、就職せずに進学することへの不安は自然と取り除かれました。

## 2.3 留學へ

経済学者を目指す以上、アメリカで Ph.D. を取得することに迷いはありませんでした。というのも、他の学問と比較しても、経済学はアメリカ中心の傾向が強いため、実際に私が東大でお世話になった先生方の多くがアメリカで Ph.D. を取得されています。ただそれだけではなく、逆立ちしても敵わないような「すごい奴」に会ってみたい、そしてその中で自分の力がどれだけ通用するのか試したい、といった理由もありました。決して上手くいく保証はありませんが、田舎育ちの私には想像もつかなかった刺激的な環境に身を置くことは人生の財産になるだろうと考え、留學を決意しました。

## 3 出願前

### 3.1 出願準備

以下では、実際に出願する過程で私が意識したことや感じたことを手短かに記しています。

#### 3.1.1 成績

論文の掲載に時間を要する経済学では、大学院の必修3教科6科目（通称「コア科目」）の成績が比較的重要だと言われています。加えて、数学での好成績もアピールできると良いでしょうか。

#### 3.1.2 各種試験

私が出願した学校では、TOEFL と GRE が要求されました。これらに足切り以上の意味合いはないはずなので、いかに時間とお金をかけないかが大事だと思います。結果としては、各1回受験し、TOEFL 107 (R30/L29/S23/W25) と GRE 329 (V159/Q170/AW4.0) のスコアを提出しました。TOEFL のスコアは奨学金に応募する際にも要求されるので、早めのスコアメイクが吉です。

#### 3.1.3 ライティングサンプル<sup>1</sup>

私は卒業論文（を共著者と修正したもの）と修士論文の2つを提出しました。多くの出願者がいることを考えると、どれほど目を通してもらえるかわからなかったため、SOP でも論文の内容には触れました。

#### 3.1.4 SOP<sup>1</sup>

SOP ではこれまでの経験を踏まえた志望動機を書くわけですが、私が気をつけたのは客観的な情報と主観的な表現をバランスよく盛り込むことです。受賞歴や研究経験といった客観的な情報を並べるだけではなく、それらを通じて自分が何を感じたかという主観的な表現を随所に散りばめ、研究に対する熱意が伝わるように工夫しました。これは財団の加藤雄一郎先生からいただいたア

---

<sup>1</sup>これら2つについては、英文校正サービスを利用しました。

ドバイスで、ありがたいことに加藤先生には何度も SOP を添削していただきました。またこうして出来上がった文章を推薦者の先生方にも読んで頂き、経済学者の立場から見て違和感のある箇所は無いかなどを確かめていただきました。

### 3.1.5 外部奨学金

獲得した奨学金の情報は SOP にも記載した方が良いと思います。外部奨学金があると、選考時に良いシグナルとして働くだけでなく、大学が適宜上乘せしてくれるので、全額を大学から受け取る場合よりトータルの支給額が大きくなります。なお申請時に提出する研究計画書については、審査員の方が専門外である可能性が高いと考え、専門用語を避けた平易な文章を心がけました。

### 3.1.6 推薦状

私は、先に述べたゼミの先生お二人（うち一人は修士論文の指導教官）に加えて、関心分野が近く、授業を履修した後に修士論文の相談に乗っていただいた先生にも推薦状を依頼しました。私の場合、推薦者の先生方とは日頃から研究の相談をさせていただいており、推薦状を依頼する段階で私のことをよく知って頂けていたように思います。そのため、御三方とも快く引き受けてくださり、特段苦労することはありませんでした。

推薦状が一番重要な出願資料だとも言われます。確かに推薦状は出願者が唯一コントロールできないもので<sup>2</sup>、過去に多くの学生を見てきた経済学者からの客観的な評価が信頼されるのも頷けます。ただし、他のことをそっちのけで推薦状だけを強くするというのは不可能なわけで、結局は授業や研究を通じて客観的な成果を挙げることが必要です。加えて、日頃からコミュニケーションをとり、十分な信頼関係を築けていれば、自然と強く推薦していただけるのではないのでしょうか。もっとも、研究について相談できる人がいるというのは、推薦状を抜きにしても、より良い研究を行うには大切なはずです。

## 3.2 出願校の選定

経済学では大学のランキングにある程度のコンセンサスがあり、大抵の場合ランキングの上位から出願していくこととなります。入学後に関心分野が変わる可能性も考慮して、総合的に見て優れた高ランクのプログラムがより志望されている気がします。また私の場合、妻が同時期にアメリカの修士のプログラムに出願しており、同じ学校に出願できるプログラムがあるか、もしくは一緒に住める距離に出願可能な他大学があるかも加味しました<sup>3</sup>。

## 4 出願後

### 4.1 合否が分かるまで

日本の入試と違って、合格発表の日があらかじめ決められているわけではないので、出願後はただ待つだけの状態が続きました<sup>4</sup>。私の場合、早い学校で1月中旬、その他は2月中旬以降に結

<sup>2</sup>他の分野では、出願者が自ら推薦状を書いて推薦者にサインをもらうこともあるようですが、経済学では（少なくとも私の周囲では）自分で推薦状を書いたという話は聞きません。そして推薦者は、自身の推薦状の信頼を損なわないためにも、被推薦者を過去の自分の学生と比較した客観性に富んだレターを書くそうです。

<sup>3</sup>日本にパートナーがいる場合、単身で渡米するか、一緒に渡米するかの選択を迫られます。自分たちはどの形を選ぶのかを早い段階で十分に話し合うことが大事です。出願準備で忙しく後回しにしたくなるかもしれませんが、いずれは直面する問題です。なにより早めに進む道を決めておけば、その分準備に時間をかけられます。

<sup>4</sup>1校のみ面接がありました。それも審査というよりプログラムの宣伝の印象が強いものでした。

果が判明しました。ほとんどの学校はメールで合否を教えてくださいましたが、中にはアメリカから電話をかけてきた学校もありました。

## 4.2 合格してから

合格した大学の先生や学生からメールが届き、彼らとのミーティングがしばらく続きました。特にMITについては、ビジット前にもかかわらず4人の先生とお話することができ、熱心な勧誘を受けました。MITには私の関心に近い研究をしている先生が多く在籍しており、出願前から第一志望でした。そんな憧れの大学の、普段から論文で名前を目にする超一流の経済学者から「是非うちに来て欲しい」と言われれば、MITに行くことに迷いはありませんでした。さらに、妻がMITから程近い大学のプログラムに合格したこともあり、正式な返事こそしなかったものの、この時点でMITに進学することを決めていました。

## 4.3 キャンパスビジット

合格した学校のいくつかは対面でキャンパスビジットを開催したのですが、日程の関係でMITにのみ訪問することができたので、その様子を記したいと思います。キャンパスビジットは2日間行われ、朝から夕方までは先生や学生とミーティングしたり、実際の講義に参加したりし、夜にはパーティーというハードスケジュールでした<sup>5</sup>。忙しかったものの、入学までの過ごし方や授業の選び方などについて様々な視点から意見をもらい、今後の方針が明確になりました。そして何より、9月から同級生になる人たちと早いうちに知り合えたのが大きかったです。

さらにMIT経済学部のユニークな点は、できるだけホテルではなく学生の家ホームステイすることを推奨していたことです。私も、奥さんが経済学博士課程に在籍するメキシコ人夫妻のお宅に3日間お世話になりました。彼らにはキャンパス内を案内してもらったり、日々の生活スタイルを見せてもらったりしたことで、進学後の日常生活について具体的なイメージを持ってました。さらに旦那さんの通う大学と私の妻の進学先が同じという偶然もあり、住む場所に関しても助言をもらうことができました。

## 4.4 進学先を決定してから

帰国後まもなく正式にMITに進学する旨を伝えました。その後は現在に至るまで、同じ研究科から今年留学する友達と情報を共有しながら、諸々の準備を進めているところです。また高校時代や大学時代の友達と久しぶりに会い、今や立派な社会人になった彼らから刺激を受けています。

## 5 雑感

先にも述べた通り、学部時代の恩師のお二人に出会えていなければ、まず間違いなく今の自分はありません。経済学者を目指して留学することもなければ、そもそも修士課程にさえ進んでいなかったでしょう。当時目標のなかった自分がその後どうなっていたらと想像するだけでゾッとします。もちろん自分の進む道を最後に決めるのは自分ですが、然るべきタイミングで然るべき人と出会うことの大切さが身に沁みました。アメリカでも許す限り多くの人と関わりを持ち、生涯にわたって研究を共にできる先生や友人を見つけたいと思います。

---

<sup>5</sup>今スケジュールを見返したところ、2日間を通じて5人の学生及び7人の先生との面談、5つの講義に参加といった具合でした。そのほかにもランチセミナーや学生生活に関するプレゼンなどがありました。

## 6 おわりに

何かと暗いニュースが多いご時世にもかかわらず、私が不安なく留学に臨めるのは船井情報科学振興財団の皆様のおかげです。また両親や妻、祖父母、弟妹をはじめとする家族はいつでも私の夢を応援してくれています。自身の知的好奇心からこの道を選んだわけですが、財団の皆様や家族、先生方に少しでも誇りに思ってもらえるよう、自分なりの形で精進していきます。